

学内六報

2023.12.21

no.1577



小石川植物園のショクダイオオコンニャク (12月8日)



13年ぶりの
強烈な臭い!

→p.10



社会的分断とデジタル革命の時代における人間性の再興
Tokyo Forum 2023

UTokyo Day 特別座談会

持続可能な大学経営モデルとは?



11月30日～12月1日、現代が直面する課題と未来の人類社会のあり方について話し合う「東京フォーラム 2023 Shaping the Future」が開催されました。5回目となる今年のテーマは、社会的分断とデジタル革命の時代における人間性の再興。国内外から30人以上の識者と学生が安田講堂とオンライン空間に集い、議論を展開しました。全部で10を数えたプログラムから、2日目の学長セッション「デジタル革命の時代における大学の役割」で展開されたディスカッションの様相を抄録で紹介합니다。

AIを使いこなすための能力とは

藤井 学長セッションのテーマは、デジタルトランスフォーメーション（DX）の時代における大学の役割です。DXは我々の日常生活においても拡大、進展を続けています。また、AIおよびデータ主導型のアプローチが、最近では科学研究の世界にも入り込んできています。こういった状況を踏まえ、教育、研究、そして全般的な大学の役割について4名の総長・学長に伺います。

ユ AI（人工知能）に関連して、三つの能力が学生に不可欠になってきていると思います。一つ目は、いかにAIを使いこなすかという能力。二つ目は、効果的な質問をする能力です。質問の仕方によって、AIが生成する回答は違ってきます。つまりプロンプト・エンジニアリングと呼ばれる能力を身につけることができれば、AIとのコミュニケーションが上手に取れることになり、AIをコラボレーションのツールとして使えるようになります。三つ目は、さまざまな領域の知識を文脈的に理解し、それを問題解決のために使う能力です。ただ単に事実を収集し、情報を収集し、それを記憶するといった能力というのは以前ほど重要

ではなくなってきました。情報が必要であればAIが提供してくれるからです。その情報を知恵に変えていくための力が重要です。我々の大学でもAIを一般教養のカリキュラムに組み込んでいます。

ジェンダーバイアス増強の懸念

高橋 日本の高等教育における課題の一つがジェンダーギャップです。AIを考える際、それを忘れてはいけません。学部での女子学生比率は男子学生よりもいまだに10ポイント低いという状態です。院生になると、さらにその格差は拡がり、講師、准教授、教授とどんどんギャップが大きくなります。これが日本の大学における現状です。学長では女性は13.9%、男性が86.1%。この状況を変えなければなりません。若い世代はこの状況を見ています。このジェンダーギャップが、日本の社会、学問、学术界において最も切迫した問題だと思います。ジェンダーの役割や無意識のバイアスはデータの中に潜んでいるので、AIが導入されることでこういった傾向がさらに増強するのではないかと懸念しています。

マルワラ AIリテラシーはとても重要だと考えていますが、同時に学際的なアプローチを教育に導入する必要があると

思います。化学、工学を専攻している人たちは人文社会科学の科目も履修する。その逆もまたしかり、ということが必要です。そして事実を確認する能力がとても重要です。ChatGPTでテストを試してみましたが、簡単に確認できるような事実に関しても、私が知っている人についての質問についても不正確な答えが返ってきました。この不正確な情報に対応するために、どうすべきか。事実を検証するスキルを教えなければなりません。AIリテラシーに加えてデータリテラシーも教えなければなりません。

社会の変化について

キム 梨花女子大学校でのAIに関する取り組みを紹介します。2014年に学際的な専攻を作りました。ビッグデータアナリティクスという修士、博士号のコースです。ビッグデータを理解して、爆発的に増えるデータをいろいろな分野で活用していこうと考えました。また、データサイエンスの学部を作りました。そして今年、AI学部も設立しました。アルゴリズムを作る人から始まり、誰もがAIのユーザーになっていくので、このように全ての科、一つの学部だけでは不十分だということで学部まで作ったわけ

初日には、藤井輝夫総長①と韓国SKグループのチェ・テウォン会長②による開会挨拶に続き、チュラロンコン大学のスリチャイ・ワンゲオ名誉教授③、カリフォルニア大学バークレー校のアリソン・ゴブニック卓越教授④、藤原帰一名誉教授⑤の3人が基調講演。続いてプレナリートークセッション⑥、ビジネスリーダーセッション「日本と韓国の連携によるグローバル経済の新地平—起業家マインドを共にはぐくむ—」⑦を行いました。2日目には「ロボットが投げかける問い—人間性とは何か?」⑧、ユースセッション「現役東大生×韓国の学生」⑨、学長セッション、そして「社会的分断への架橋：グローバル commons 保全と人間性の再興」に続いて、総括セッション「未来を俯瞰する：社会的分断とデジタルトランスフォーメーションの中で」⑩を実施。最後に藤井総長と崔鍾賢学術院のバク・イングク院長⑪が閉会挨拶を述べました。総合司会はNHKアナウンサーの山本美希さんが担当しました。アーカイブ動画はこちら→



です。AIは様々な多岐にわたる影響があるので、一つの学部だけでは不十分だということです。社会で起きていることに、我々はなんとか追いつこうとしています。今、新しいテクノロジーが学外で出てきています。その一歩先に行くことはできないとしても、少なくとも遅れないようについていこうと努力しています。

ユ AIのテクノロジーによって格差が生まれる可能性があります。特に地域、あるいは性別などによる格差や分断の可能性です。AIの技術は、学習データに規定される、集約されるという性質があるからです。データに含まれているバイアス、つまり白人あるいは男性というのが顔認識においてもよく使われています。ChatGPTなどに関しても主に英語圏のデータを使って学習しているということです。誤った情報がリークされたり、著作権が侵害されたりといったリスクもあります。複数のテクノロジーや規制と組み合わせ対峙していく必要があると思います。そして、より複雑な問題も発生してきています。例えば、違法なコンテンツの作成、特にDeepfakeなどです。個人レベルでそういったコンテンツを生成して共有するというのが簡単にできるようになってきています。このような中で、情報の真正性を確認する能力というものが不可欠になってきています。AI倫理の教育も重要です。ソウル大学校では2019年にAI研究所を設立しました。そして研究所の中に、さらにセンターを設置し、学際的、法的、社会的な問題に

関する研究を行っています。

高橋 大学院への進学率の低さも指摘したいと思います。女性も男性もです。2018年、日本では人口100万人あたり550人くらいしか修士号を取得していません。博士号では100万人あたり120人です。我々は大学院に進学するように学生を後押ししていかなければなりません。日本の企業、自治体、国も修士号や博士号の価値をもっと評価していかなければなりません。DXの時代において、より広範な知識を持つことが求められています。より批判的に考える能力も必要です。また真実を見極める能力も求められます。DXに対応していくためには、より高位の学位を持つ人たちの数を社会の中で増やしていくことが必須だと考えています。

産業界との連携がカギ

マルワラ 大切なのは、大学と産業界の連携を強めることです。AIの専門家が大学を離れて、いわゆるビッグテックと呼ばれる北米の大企業に移動しています。民間部門の方が教育機関よりも給料が高いからかという、必ずしもそうではありません。大学と産業界との関係をさらに強化しなければいけないということです。これは科学や技術の学部だけの話ではありません。産業界が必要としているスキルは、テクニカルなものだけではないからです。また、インターネットで見つけられるデータベースの50%は英語であるとも言われます。日本語は4%に過ぎません。これも大規模言語モデルの

学習に影響を与えるわけで、こういった格差をどのように見ていくのかということを考えてくなくてはなりません。

大学は社会的責任を負う

キム 大学は社会の中で、意味のある重要な機関になっていかなければなりません。社会とコミュニケーションを図り、共同で研究をしていく。私たちの大学の周りに壁があるのですが、それを取り払ってボーダーレスな大学を作ろうとしています。物理的な構造も変え、新しい大学の使命に合うような形にしていきます。それから、大学はグローバルな社会的責任を負っています。奨学金制度を設置してグローバルサウスとの連携も深めていきます。

藤井 本当に興味深く、そして重要な点が数多く指摘されました。必要なのは新しい教育プログラムで、これを大学教育の中に取り込んでいかなければならないということです。そして、ジェンダーギャップ。様々なテクノロジーへの平等なアクセス。どうやって社会的な規範をシステムの中に取り込んでいくのか。倫理的、法的、社会的な課題に関して、それを行っていくということがとても重要だという指摘がありました。そして、不可欠なのが社会との協働です。そういった中でグローバルな責任を果たしていくということが我々大学に求められています。

持続可能な新しい 大学経営モデルとは?

UTokyo Day 2023
特別座談会より

従来の「株主総会」から発展したイベント「UTokyo Day」。第2回となる今回は、「新しい大学モデルの実現に向けたトランスフォーメーション」をテーマとして、11月22日にオンラインで開催されました。本学の総長と財務経営 CFO が、経済財政諮問会議の議員を務める証券アナリスト、福澤諭吉の理念を受け継ぐ私学の財務担当理事のお二人をゲストにお迎えし、これからの大学経営について率直に話し合った座談会の模様を、ダイジェストして紹介します。

UTokyo Day 2023 プログラム

挨拶：新しい大学モデルの実現を目指して

藤井輝夫

総長対話：対話の重要性、異なる立場への想像力

藤井輝夫、アントレプレナーシップ教育デザイン寄附講座受講生、村田幸優（工学系研究科）

特別座談会：持続可能な大学経営モデル

中空麻奈、山岸広太郎、藤井輝夫、菅野暁



新しい大学経営モデルが必要

菅野 私は40年ほど銀行と資産運用会社で働いてきました。新しい大学経営モデルづくりを手伝うよう請われ、今年度財務経営CFO*に就任しました。

山岸 慶應のベンチャーキャピタルを経営していましたが、大学のスタートアップ支援について伊藤公平塾長と話した際に財務担当理事も務めるよう言われまして、いまは両方の仕事を進めています。

中空 ずっと金融畑でリサーチに携わり、ESGストラテジストを務めてきました。経済財政諮問会議の一員として、今後の日本を考えるにあたっては間違いなく大学の競争力強化が必要だと考えています。

藤井 2021年4月に就任してまとめた活動指針「UTokyo Compass」で、大学が自律的に活動するための新しい経営モデルが必要だと書きました。今日は皆さんの貴重な意見を伺いたいと思います。

菅野 なぜ新しい経営モデルが必要なのか。国立大学をめぐる昨今の環境の変化があります。法人化以降、運営費交付金が減ってきました。これにより大学経営への圧力、資金調達が多様化の必要性が増しています。また、日本の大学の研究力低下が叫ばれます。大学ランキングで日本の大学が十傑に入らず、これが国力

の低下につながったとも言われます。さらに、18歳人口の減少で大学経営が厳しくなるのは確実と見られます。大学の財務環境が厳しい中、持続可能な大学経営に向けて何が重要になるでしょうか。

中空 大学が競争力を強めるよう腐心することが必要です。そのためには大学の強みを理解しないとけません。少子化で定員割れが増えるなら、海外からの留学生を増やすのか。国は満遍なくお金を配るのか、いい施策を提案する大学を選んで配るのか。お金がつかない分野の重要性をどう定義するのか。大学はどこから資金調達するのか。国内だけの競争力でのいいのか。世界と伍すためにどう工夫するのか。今後の人口減にどう対応するのか。いくつかの問いかけが必要です。

課題の定義がないのが課題

山岸 私の認識では、慶應には三つの問題があります。一つは課題の定義ができていないこと。多様な構成員を擁する大学で、何を課題とするかは人によります。大学ランキングの低下を問題とする人がいる一方で、気にならないと思う人もいます。塾員（卒業生）の影響力も大きい。どこに向かうべきかのグランドデザインを執行部で議論しているところ。組織のケイパビリティが低いのも問題です。

たとえば上場企業と比べて本部機能が非常に弱いと思います。近年、大学に求められるものが変わってきています。社会が慶應に求めることに応えるには、スタッフの強化がどうしても必要です。もう一つは資金の問題。校舎を建て替えるだけでもギリギリです。リーマンショックで弱った体力の改善途上の段階です。

藤井 国立大学法人化から20年。その理念は、誰もがアクセスできる高等教育の提供を維持した上で、経営の自由度を高めて各大学が描く姿に向けて努力しようというものだったと思います。その後、二つの難問が生じました。一つは運営費交付金の削減。もう一つは、公務員の総人件費毎年約1%減の方針が国立大学にも及んだことです。自律的な活動を自ら切り開こうとする大学にとってこれがネックでした。中空さんの問いに依るなら、東大は当然に世界と伍していくわけであり、グローバル化もD&Iも進めないといけません。また、国の支援だけに頼るのでなく、学外の皆さんからの支援を集めて財務経営をする必要があります。そのための体制を整えているところです。

山岸 福澤諭吉は「躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり」という言葉を残しました。慶應は率先して変わらなければいけません。そのためのコンセンサスをどうつくるか。教員だけでは難しいので、塾長室にコンサルなどのプロを入れて議論し、決断する

*最高財務責任者（Chief Financial Officer）

ための作業を進めています。変えるための原資はどうするのか。欧米の大学の学費の高さの背景には、教育の質を高めるなら学費でという考えがあると思います。しかし、国内に目を向けると、国立大学の学費が低すぎるのが問題です。普通の家庭は学費が低いほうを選ぶことになります。国立大学の授業料を上げてほしいところです。外部資金について言えば、慶應では年60億～100億円の寄付金がありますが、ファンドレイジングの体制でいうと東大の1/10以下。そこを拡充させるスキーム作りに取り組んでいます。

大学財務をエンダウメント型へ

藤井 持続可能な大学モデルとしては、補助金型からエンダウメント型に財務のあり方を切り替えることが必要だと考えています。新しい事業を始める際、国から補助金を獲得するものの、段々とその金額が減らされて数年後には無くなるのが従来の形でした。一方、エンダウメント型では、寄付金や自己資金を積み上げ、その運用益を活用します。これにより、

継続的に事業を進められ、大学が重要だと考える分野の支援も可能になり、外部資金獲得が難しい分野を大学の判断で継続的に支えることができます。そのためには資金循環をしっかりと構築しないといけません。大学が研究・教育の活動を学外に伝え、学知の社会的価値を知っていただき、次の支援につなげる。その支援により財務基盤を強化し、さらに次の活動につなげる、というサイクルを回したい。そうした思いもあり、今年の8月から菅野CFOに着任いただいています。

菅野 たとえばスタンフォード大学は基金が4兆円、運用益が年2000億円あるといわれます。主体的な大学運営のためには自ら基金を運用することが必要でしょう。そこは私の任務だと思っています。
中空 日本の教育が何を重視するのかのポイントです。従来の教育は、すべての子のレベルUPを目指しましたが、それはある程度できたと思います。ここからは競争が重要です。そのなかで、これは国のお金でやる・やらないの区別が生じます。外の目にさらすディスクロージャ

ーが必要です。統合報告書やサステナビリティ・レポートなどの取り組みを続ければ自ずと形はできてくるはずですが、次々に問題が出てきますが、お二人の話を聞いて、大いに期待しています。

藤井 人口減少が進むなかで高等教育を今後どうしていくべきでしょうか。

山岸 慶應では、理系はもともとグローバルで、留学生も多く、競争志向の人が多い。文系の場合は日本語に興味がある留学生がほとんど。グローバルへのスタンスは人それぞれです。執行部の一人としては、留学生とともに学ぶことによって、日本人学生が英語力を上げたり外に出たくなることをもちろん応援しますが、欧米型の大学との競争は現実的には難しいと思っています。少子化による定員割れについては、教育の質を保てるのかという懸念はありますが、いまのところ危機感はありません。一方で、一貫校からの進学と外からの進学の割合をどうするかという課題は感じています。

中空 ゆとり教育によって大学の競争力は落ちた面があると思いますが、企業とタイアップして特許を取り、技術をフックに世界の目を向けさせることができるのではないのでしょうか。資金調達については、税金をもらえば制約もついてきます。それ以外の部分でどれだけチャレンジできるかが重要。大学の資産を担保して活用することもできるでしょう。大学に強い競争力があれば、人口減は問題にならないと思います。競争力の強い大学なら、自然に留学生も集まるはずですが。

藤井 encouragingな座談会になりました。今回の議論を踏まえて、持続可能な経営モデルを作っていきます。

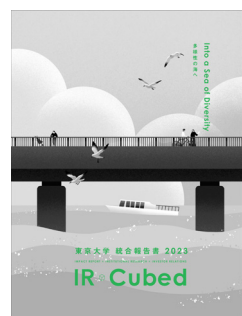


座談会に先立って行われた総長と学生の対話セッションには、包括連携に基づく単位互換制度で参加したお茶の水女子大学の学生を含む、アントレプレナーシップ教育デザイン寄附講座の修了生8名が登壇しました。いずれも、工学部・榎原菜央さんの熱いアフリカ愛に呼応してケニアのスタディツアーに参加した皆さんです。

お茶大の岡本克美さんは、この講座を受けなかったら欧州に行っていたはずだが仲間から刺激されて未知のケニアに行くことを決めたと振り返り、同じくお茶大の千坂日路さんは、講座後の「壁打ち」の場で歳の近いブリッジングリーダーと遅くまで語り合えたことが非常に刺激

的だったと語りました。工学部・山下彩夏さんは、お茶大の学生が異なる視点を持ち込んでくれたことで対話が深まり、全体が活性化したと指摘。工学部のプラウト・アルヴィンさんは、今回のようなツアーを体験活動プログラムに組み込んで東大→アフリカの経路を発展させたいと展望を語りました。

実はこの講座に何度も参加したことがあるという藤井総長は、学生との対話を通して、実際に現場に出かけて現地の人と話し、そこで感じたことを仲間と共有する意義を確認。今後も学生が自身の興味や好きなことを追求する機会が持てるよう支援したいと締めくくりました。



東大の統合報告書は今回で6作目。目指す新しい大学モデルの構築に向けた重点投資計画を紹介しています。※UTokyo Day当日の録画も閲覧できます。





海と希望の学校 — 震災復興の先へ —

第29回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に、社会科学研究所とタッグを組んで行う地域連携プロジェクト——海をベースにしたローカルアイデンティティの再構築を通じ、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取り組み——です。研究機関であると同時に地域社会の一員としての役割を果たすべく、活動を展開しています。

未来に繋がる希望

2005年8月1日早朝、私たちは大槌湾を見下ろす展望台で、一心不乱に八木アンテナを振っていた。数日前に湾内に放流したアカウミガメから装置が切り離される予定時刻が迫り、装置からの電波を緊張しつつ待っていたその時、大学院生の携帯電話に妻から着信が入った。当時私は携帯電話を持っていなかったのに、緊急の連絡は学生の携帯にかかってくるのだ。学生曰く「奥さんのママ友のおじいちゃんが朝湾内で漁をしていたら変な赤い装置が浮かんでいて、東大の名前が書いてあったから、たぶん先生の仕業だろうと思って拾ってきたそうです。ブツは今日幼稚園で奥さんに引き渡されるとのことです」。かくして、世界初のアカウミガメ亜成体の採餌海域における行動データは、鶴住居幼稚園を経由して無事研究者の手元に届いたのであった。

2004年に家族と共に釜石市に移り住んだ後、私は公私共にどっぷりと地元へ浸かった。例えば、幼稚園の運動会で息子をビデオカメラで狙っていると、目の前で若いお母さん二人がなにやら話している。



腰に加速度ロガーをつけられた少年

装置からの信号を待つ榑崎友子さん



「ねえ、ちょっとあの男の子見て。腰に変な機械がついている」
「あれはバイオリギングよ」

先月幼稚園で行った講演の成果を目の当たりにし私は大満足。息子と娘に定期的に加速度ロガーを付けて、ハイハイからたどどしく歩く様子、そして徒競走で走る時のデータを取ってきたが、小学校高学年から装着を拒絶される様になった。研究室のHDに入れてあったそのデータは残念ながら2011年の津波で失われてしまった。津波を機に、職場は千葉県柏市に移ったが、毎年夏には大学院生とともに大槌町にこもった。約20年間で、国内外から来た計40人のポストドクと大学院生が、大槌周辺海域でウミガメ・オオミズナギドリ・マンボウ・シロザケの調査に動んできた。

海と希望の学校は、大学から地元へ働きかけるアウトリーチ的要素が強い活動だ。一方で、私たちもまた大きく影響を受けている。大槌とは縁もゆかりも無かった若者が、多感な20代の夏を大槌周辺海域で2年から5年以上も過ごすのだ。特に、学位を取得する程深く現地と関わった者ほど、三陸への思い入れは強いようで、調査だけでなくプライベート旅行でもしばしばやって来る。ウミガメ調査を立ち上げた榑崎

友子さんや、津波直後にヒッチハイクで盛岡までとりつき東大本部に教職員学生が無事であるという第一報を入れた青木かがりさんは、いずれも大学の先生になった。今でも共同利用研究制度を利用して、子連れで大槌にやって来る。やがて大学生を連れて来るに違いない。私自身も大きく変わった。世の中のIT化に抗う昔気質のスタイルを悔い改め、クラウド上に全てのデータをバックアップするようになった。当然スマホも最新モデルを所持している。さらには、誰でも使えるデータベースを構築し、バイオリギングデータのオープン化を進めている。私にとって、人とデータこそ未来に繋がる希望なのである。

<https://www.bip-earth.com>

マンボウと戯れる少女（特に本文中には出てきませんが……）



「海と希望の学校」公式 X (@umitokibo)

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



ぶらり 構内ショップの旅

第20回

Girolomoni cafe di ape @白金キャンパスの巻

こだわりのオーガニックランチ

11月に白金キャンパスの近代医科学記念館内にリニューアルオープンしたオーガニックカフェ「ジロロモニカフェ ディアペ」。駒場リサーチキャンパスにある「アーペクチャー ナチュラル」の姉妹店で、有機野菜や天然魚介などの厳選食材を使った島田伸幸シェフの料理を味わうことができます。

メインメニューは2種類のソースから選べる日替わりパスタ（単品¥600）と有機野菜サラダ（単品¥600）。パスタは店名にもなっている、イタリアオーガニック農業の先駆者ジーノ・ジロロモニ氏の有機ブランドを使っています。パスタソースには新鮮なブリ、ハーブを含む植物性飼料で育てた「ハーブ豚」やシラスとネギのオリーブオイルソースなど、その時々旬の食材が登場します。有機栽培の野菜をたっぷり食べられるサラダは、グリーンリーフと4種類の惣菜、そして自家製のドレッシングが付いたもの。パスタとサラダのお得なセットは¥1,000。一番人気は、これにコーヒーやルイボスティなどの飲み物が付いたドリンクセット（¥1,300）です。店で提供されている水はハーブやフルーツが入った「デトックスウォーター」。お代わり自由です。他にも国産の有機小麦で作ったフォッカッチャ（¥100）や焼き菓子（¥300）なども店頭で購入できます。

今後はピザやカレーなどメニューを増やしていく予定で、ゆくゆくはワインなども提供できるようにしたいと話す店長の田辺幸子さん。天気の良い日にはぜひテラス席で木々を見ながら、身体が喜ぶご飯を食べて欲しいと言います。「今後第一線で活躍するであろう学生さんに食べていただき、身体も心も健康になってもらえたらと思っています」



店長の田辺幸子さん



日替わりパスタと有機サラダのセット。営業日はインスタグラムのストーリーで配信しています



<http://www.ciaobella.jp/ape/>

※価格は税込み

デジタル万華鏡

第38回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

附属図書館情報サービス課
情報サービスチーム調査支援担当

小島裕美子

図書館復興と寄贈資料

関東大震災によりほぼすべての蔵書を焼失し、建物ごと灰燼に帰した東京帝国大学附属図書館。その後の復興運動により国内外から数多くのご支援を受け、再興されたのが、現在の総合図書館です。

当時寄贈された資料の中でも「南葵文庫」は、質・量ともに今なお総合図書館の根幹を成すコレクションの一つです。1階の記念室には徳川慶喜による同文庫の扁額が飾られており、その名がよく知られています。

南葵文庫は、紀州の「南紀」と徳川家紋の「葵」をかけて命名された私設図書館でした。運営していたのは、紀州徳川家の当主であった徳川頼倫。頼倫は震災発生のわずか1ヵ月後に図書館復興のための寄贈を決定します。紀州徳川家伝来の2万冊を中心に、その後収集された資料をあわせて国内でも類を見ない貴重な資料群から、約96,000点が翌年7月に寄贈されました。

現在総合図書館では資料の電子化を進めており、南葵文庫も貴重図書を中心にデジタルアーカイブで閲覧することができます。鎌倉殿に関連して『吾妻鏡』、根強い人気の『信長記』、藤原道長なら『栄花物語』というように、ご自宅で年末年始に見ていただくのも一興。場所や時間を問わず貴重な資料を閲覧できるのも、元を正せば頼倫の英断によるものです。

さて扁額といえば、もう一つ。地下の貴重図書閲覧室に飾られている「青洲文庫」の扁額はご存じでしょうか。初代内閣総理大臣の伊藤博文が揮毫したもので、復興のため同文庫を購入した際、扁額が寄贈されました。青洲文庫も『源氏物語』写本を筆頭にデジタル画像を公開しています。こちらも是非ご覧ください。

様々な想いが込められた資料を受け継ぎ、守り、供し、未来へ、世界へつなぐため、図書館は進化し続けます。これまでも、これからも。



『栄花物語』第1巻

<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/nanki/page/home>
<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/seishu/page/home>

ワタシのオシゴト 第211回

RELAY COLUMN

地震研究所 前田美貴子
財務チーム(契約担当)

緑とグラウンドに囲まれた職場で



貴重な波形と一緒に

弥生キャンパスの農学部グラウンドを越えた先にある地震研究所1号館で今年の4月より勤務しています。こちらの建物は大地震の中でも防災拠点として情報を発信できる安全な免震構造となっています。

私の担当部署では、地震・火山に関する研究機器の調達や調査契約、支払業務などを行っています。海洋調査は天候によって金額が大きく変るため、ハラハラすることもあります。チームの方々や教員の方々に支えられながら楽しく勤務しています。

地震研究所は事務と教員との距離が近く、中でも8月に行われた暑気払いは盛大で、教員・学生・事務だけでなく、卒業生・OBなど200名を超える方の参加がありました。ケータリングの他、所内の方が腕を振るった美味しい料理を堪能しながら、様々な方と親睦を深められる貴重な場となりました。



暑気払いでのお気に入りの写真です

得意ワザ：健康で寝つきが早い

自分の性格：心配性ですが、すぐに忘れます

次回執筆者のご指名：大久保早織さん

次回執筆者との関係：前職でお世話になった同僚です

次回執筆者の紹介：周りを笑顔にしてくれる素敵な方

蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives
ぶんしょかん

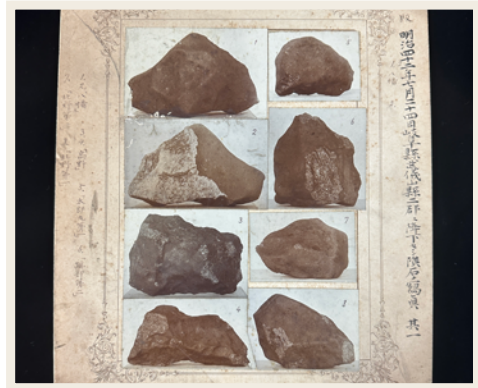


第47回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

隕石ノ寫眞

今回の蔵出し資料は、「明治四十二年七月二十四日岐阜縣武儀山縣二郡ニ落下セシ隕石ノ寫眞 其一」と書かれた隕石の写真です。



今から114年前の1909(明治42)年7月24日午前5時44分頃、岐阜県美濃市を中心とする広い地域に隕石が降り注ぎました。この隕石は後に美濃隕石と呼ばれ、これまでに29個確認されています。当時の新聞によると、隕石が落下した地域では火山が破裂したような爆音が響き、また揺れが長く続いたため地震かと思われ、屋外に飛び出した人々によって、たらい程の大きさの怪光が尾を引き飛んでいくところが目撃されました。20km離れた大垣でも、大砲や雷が鳴ったような音を聞いていた人物がいました。大垣出身で、農科大学地質学・土壌学講座(現在の土壌圏科学研究室)助教授脇水鉄五郎(1867-1942)です。たまたま現場近くに居た脇水は、翌日の新聞で音の正体が隕石によるものだったと分かる、その日のうちに現場へ行き数個の隕石を採取しました。

改めて蔵出し資料を見てみましょう。隕石名が明記され、下にはスケールが貼ってある台紙付写真は、大判のアルバム(F0227/SF01/0001)に挟みこまれています。アルバムには写真の隕石(6個、8カット)を含め計23個の美濃隕石と、隕石名が記されていない4カット(1個の隕石を4方向から撮ったものか)、そして調査風景(ただし、いつの調査か不明)の写真が収められています。2年後に脇水が著した『美濃隕石：附・日本隕石略説』には、日本でそれまでに確認されていた隕石24個に対し、それを一挙に上回る25個を確認した美濃隕石降下について、「日本隕石史に取りては未曾有の大事件たりしなり」と記しています。

100年以上前の隕石の写真。未曾有の大事件にたまたま遭遇した研究者の「ワクワク」が伝わってきます。 (主事員：村上こずえ)

インタープリターズ・第196回 バイブル

生産技術研究所／情報学環 准教授
科学技術コミュニケーション部門

川越至桜

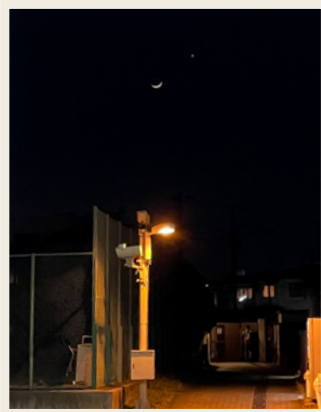
宇宙と地球と社会と私

冬本番、日の入りが早くなり、帰宅する時間帯でも星がキラキラと綺麗に見える季節になった。最近、研究室を出る頃に土星が真正面（西の空）に見えているが、月が北寄りの方角や空高くに見えたり、オリオン座や冬のダイヤモンドといった星の並びを見つけたりと、冬だなあと実感する。

空を見るときは、自分の足元（の安全）を確認するようにしているが、私たちの足元の地球は、自転をしながら太陽の周りを回っていて、太陽も天の川銀河（銀河系）の中を動いている、その天の川銀河も、広大な宇宙の中を動いている。宇宙規模で考えた時、自分はどちらの方向に動いているのだろうか。そう考えると、平衡感覚を失ってクラクラするような感覚が生まれる。一方で、広い宇宙の中に地球があり、そこに自分が存在しているということを認識し、広い意味での自分の立ち位置がわかってくる様な気がする。

全体を広く捉えるという視点（神様視点とも言えるのだろうか？）と、自分という視点を引き来することは、実はとても難しいことなのではないだろうか。例えば、地球環境が変化していることは理解できても、それを自分事として捉えられているのか？と言いつ換えると、少なくとも私自身は難しいなと感じている。

複雑かつ予測困難な時代において、私たちは様々な社会課題や地球規模の課題に直面している。その課題には唯一解はなく、最適解を探し出すことが必要であり、多様な状況において、多様な立場の人たち同士で合意形成していくことが求められている。その際、自分事としての視点、多様な人々の視点、社会全体として広く捉える視点を往還することが重要になると考えられる。複雑な社会の中、たまには自然の中に身を置き、宇宙の中の自分を見つめ、自分の足元と位置付け



をゆっくり考える時間を持ちたいと思う今日この頃である。

今年2月駒場IIリサーチキャンパス西門からの空。このときは月と木星が見えている

科学技術インタープリター養成プログラム

ききんの

き

寄付でつくる東大の未来

第50回

社会連携本部渉外部門
副部門長

高橋麻子

「MeからWeへ」がミライをつくる

寄付月間の初日12月1日に、駒場IIキャンパス食堂コマニにて「教えて、洪澤さん！お金はミライをどう変えるの？UTokyo Future TV寄付月間スペシャル」をハイブリッド開催しました。ナビゲーターの洪澤健さんと東大生2名がズバリ「お金」について、会場や視聴参加者も交えてディスカッションをしました。その対話のなかから、印象に残ったことをご紹介します。まず洪澤さんから「いま日本の各家庭に眠るタンス貯金ってどれだけあると思う？」との問いに対し東大生2人とも「たくさん？かな」とイメージがつかないようでした。洪澤さんが「正解はなんと、30～50兆円です！」と言ったときには会場もざわつきました。すごい金額ですね。日本は状況が悪くなっている、お金がない、と言いながら、実は世界で最もお金を持つ国だそうです。ただし問題はそのお金がタンスで眠ってしまっている、つまり全く使われていないことです。なぜならシニア世代などが「心配で」「安心するために」持っているから。でもいくら持っても不安は解消しません。

洪澤さんは、高祖父である洪沢栄一の『論語と算盤』の一節「よく集めよく散ぜよ」の必要性を語ります。散ずるとは散財することではなく、社会にお金を回し還元すること。お金には「使う（買う）」「貯める」「寄付する」「投資する」の4つの使い方があります。「使う」と「貯める」は「自分（Me）」に対してお金を使うことですが、「寄付」や「投資」はMがひっくり返ってW（We）になるお金の流れです（ここで東大生2人からなるほど～の声が）。寄付や投資は敬遠する人もいますが、応援する気持ちや感謝が集まったものであり、ちょっとだけ「自分だけからWeへ」と視野を広げることで身近なものになると言います。東大生2人は対話の終わりに「もっと寄付しようと思った」「投資は怖いイメージだったけどやってみよう」との感想を述べていました。

少しずつ「MeからWeへ」が広がることで、善意のお金が社会に回りミライはきっと良くなっていくはず。2024年はあなたも「MeからWeへ」を始めてみませんか？



左から洪澤健さん、川崎莉音さん（法学部4年）、竹内誠一さん（農学部・運動会総務部・洋弓部4年）

動画が視聴
できます→



東京大学基金事務局（本部渉外課）

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
11月13日	史料編纂所	宮崎県都城市との連携により大型絵図のデジタルアーカイブを構築
11月14日	本部社会連携推進課	令和5年度「東京大学稷門賞」授賞式を挙行
11月14日～ 12月5日	広報室	炭素の放射性同位体で狛犬の年代を推定＝横山祐典 受刑者の更生につながる子犬の育成プログラム＝加藤淳子 狂犬病が日本に侵入するリスクを評価＝杉浦勝明 平安古典の犬と猫——「心なき」もの、「心ある」もの＝永井久美子 / 『淡青』47号「犬にまつわる東大の研究(5)-(8)」
11月15日	本部渉外課	合成生物学の国際大会iGEMで東大チームがGold Medalを受賞
11月15日	新領域創成科学研究科、物性研究所、大気海洋研究所	第14回「未来をのぞこう」を開催
11月16日	本部環境安全課	令和5年度 本部防災訓練を実施
11月16日	本部協創課、本部社会連携推進課	AI Forum 2023 開催報告「AI Synergy : Science and Society」
11月16日	本部人事企画課	「令和5年度東京大学卓越研究員」23名決定
11月17日	本部学生支援課	柔道部岡本選手が全日本ブラジリアン柔術選手権にて優勝！
11月17日	広報室	囲碁・音楽とAI——個性と即興性を考える異分野対話【特集 AI と人間社会 Vol.2】
11月20日	本部渉外課	「プレイフル社会の理論構築と社会実装プロジェクト基金」へ寄付募集を開始
11月21日	大学総合教育研究センター	公開講座などを配信する「東大TV」YouTube登録者数11万人達成
11月21日	本部渉外課	「動物言語学プロジェクト」寄付募集を開始
11月22日	総合文化研究科・教養学部	超域文化科学専攻の津田浩司教授が地域研究コンソーシアム賞研究作品賞受賞
11月24日	本部広報課	「赤浜の東大」が50歳に 大槌沿岸センターが開設50周年記念式典を開催
11月27日	本部協創課	東京大学、127量子ビットのプロセッサの導入を完了
11月29日	医学系研究科・医学部	世界保健機関 職場のメンタルヘルス対策ガイドライン日本語版のご紹介
11月30日	本部環境安全課	令和5年度 総長安全衛生バトロールを実施
11月30日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生修学旅行を開催
12月1日	宇宙線研究所	イタリアとハイパーカミオカンデ実験についての覚書を締結
12月5日	本部広報課	「海と希望の学園祭 in Kamaishi」を開催 海だ！ によるりだ！ 釜石だっ！
12月5日	相談支援研究開発センター	シンポジウム「VUCAの時代に対応した学生相談のあり方について」を開催
12月6日	本部社会連携推進課	東京大学と日本放送協会との包括連携協定締結について
12月6日	教育学研究科・教育学部	令和5年度教職課程・学芸員等実習報告会を開催
12月7日	未来ビジョン研究センター	Financing natureの発表について

表紙について

今号の表紙は、小石川植物園で久々に開花したショクダイオオコンニャクです。インドネシア・スマトラ島原産の、世界で最も大きな「花」の一つとされるサトイモ科の絶滅危惧種で、腐った肉のような悪臭を放つことでも知られます。前回の開花は2010年7月（このときは19年ぶり）。テレビで紹介されたこともあって非常に多くのお客さんが来園し、当時の現場を知る職員も多くが本当に大変だったと口を揃えて振り返ります。そのお一人が、現在植物園アドバイザーを務めるファンドレイザーの下田浩美さん。当時渉外担当だった下田

さんは自らモデルとなって「花」のサイズ感を示す役割を果たし、当時の邑田仁園長が撮った一葉は『学内広報』1401号（2010.7.26）表紙に使われました（大日本図書の小学校理科の教科書にも登場）。13年前の服があるということで再び登場をお願いしたところ「恥ずかしいけど植物園のためになるなら」とご快諾。前回の全長156cmを超えて213.5cmに成長した「花」の前で、再びモデルを務めました（撮影も再び邑田先生！）。2008年から続く東大基金「Life in Green Project」は現在第3期。牧野富太郎が残した植物標本を次代に受け継ぐための活動にご支援を！





CLOSE UP 令和5年度「東京大学稷門賞」授賞式を挙 (本部社会連携推進課)



授賞式の後、総長ほかの本学関係者と受賞者の皆さんの記念撮影が行われました

令和5年度「東京大学稷門賞」の受賞者が、「松岡 正樹様」「児玉 亨様」「小林 達夫様」「古賀 信介様」「周 順圭様」「キッコーマン株式会社様」「日本郵便株式会社様」「ダイキン工業株式会社様」「三井不動産株式会社様」に決定し、授賞式が10月24日に伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにおいて挙行されました。

本表彰は、私財の寄附、ボランティア活動

及び援助等により本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体に対し授与するもので、平成14年度より毎年度行っています。

授賞式では、選考経過の報告、各受賞代表者への表彰状の贈呈があり、その後、総長の挨拶、受賞者からの挨拶が行われました。また、授賞式に引き続き、レセプションが行われ、受賞者及び受賞関係者と本学関係者との懇談が和やかな雰囲気の中で行われました。



CLOSE UP 第14回「未来をのぞこう」を開催



パネルディスカッションの様子。本企画はキオクシアホールディングス株式会社のご支援、男女共同参画室「女子中高生の理系進路選択支援」事業、国立大学協会フェスタ2023の協賛をいただいで実施しました

10月28日、女子中高生の理系進路選択を支援するイベント「未来をのぞこう！」を現地およびオンラインにて開催しました。4年ぶりの現地開催となり、女子中高生、保護者、学校関係者などおよそ90名が参加しました。

新領域創成科学研究科の徳永朋祥研究科長による開会挨拶の後、同研究科の富田野乃准教授の司会進行のもと、大学院生3名のパネルトークが行われました。新領域創成科学研究科の右橋雅子さん(修士2年)、物性研究所の松本遥さん(修士2年)、大気海洋研究

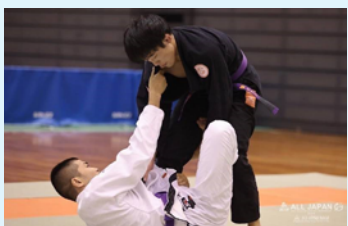
(新領域創成科学研究科、物性研究所、大気海洋研究所)

所の三木志緒乃さん(博士1年)が登壇したパネルトークでは、研究テーマ、理系進学を決めたきっかけ、大学での生活の様子、研究の楽しさや大変さ、これからの目標、就職先などが紹介されました。Q&Aでは、「理系へ進学したきっかけ」「理系を選んだ理由」「理系へ進んで大変だと思うこと」など参加者から寄せられた質問にパネラーが回答しました。

参加者からは、理系進学を前向きに考える感想が数多く寄せられ、イベントは盛況のうちに終了しました。



CLOSE UP 柔道部岡本選手が全日本ブラジリアン柔術選手権で優勝! (本部学生支援課)



決勝戦で相手選手を圧倒した岡本選手(黒道着)

10月8日~9日に兵庫県のグリーンアリーナ神戸で行われた第24回全日本ブラジリアン柔術選手権のアダルト紫帯ライト級にて、本学運動会柔道部4年の岡本雄揮選手が優勝を果たしました。トーナメント方式で行われる国内最高峰のブラジリアン柔術の大会です。

アダルト紫帯ライト級に出場した岡本選手は順調に駒を進め、準決勝へと進出。序盤でスweepによる2ポイントをリードしました

が、中盤で腕十字固めを狙うもスweepされ、ポイントは同点、ペナルティ1つ分負けている展開に。しかし、制限時間ギリギリでパスガードの効果認められてポイントが入り、みごと逆転勝利を果たしました。迎えた決勝戦は、岡本選手が圧倒的強さを見せつける試合展開に。序盤のテイクダウンを皮切りに次々と得点を重ね、最終的には12対0で相手に圧勝し、優勝を勝ち取りました。



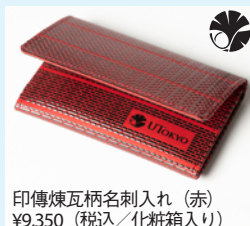
CLOSE UP 2019年度以来となる留学生修学旅行を実施 (教育学研究科・教育学部)



藍染工房の方々との記念撮影

教育学研究科・教育学部では、11月22日に恒例の留学生修学旅行を実施しました。本研究科・学部 に在籍する外国人留学生、引率の教職員の計30名が参加しました。今年度は東京都(日帰りバス旅行)にてサントリー(天然水のビール工場)にて工場見学をし、その後昼食をはさんで藍染工房・壺草苑にて

藍染体験を行いました。コロナ禍で2020~2022年度まで中止となっていた修学旅行でしたが、2023年度より再開となり、ほとんどの学生が初参加でした。普段触れる機会の少ない日本の文化を満喫すると共に、学生同士、教職員とも親交を深めることができ、有意義な留学生修学旅行となりました。



印傳煉瓦柄名刺入れ(赤) ¥9,350(税込/化粧箱入り)

UTokyo 新年の彩りを赤色煉瓦で新調しませんか?

東京大学コミュニケーションセンター(UTCC)は明治43年に「図書館製本所」として建設され、関東大震災の被災も免れた本郷キャンパス内で最古の建物です。今も建物の奥に残る古い煉瓦造りをイメージし、鹿革に漆で模様をつける手

法である革工芸の「印伝」で作られたお財布、名刺入れ、ペンケースなどを販売しています。100年以上前の建物に思いを馳せながら身の回りの小物を新調して心新たに新年を迎えませんか。運氣UPも期待できるかも?

UTCCからのお知らせ utcc.u-tokyo.ac.jp

その他の商品 ¥2,750~8,800





選抜はするけれど

学振や科研費などの採択発表の時期になると、SNSでは「採択された」という情報で溢れ、あたかも、ほとんど全ての人が採択されているようです。わざわざ不採択を宣言する人は少ないし、各SNSの表示のアルゴリズムにも依存しているので、正確な状況を表していないことを重々承知していても、やはり、目に入ってくる情報には惑わされます。実際、科研費はともかく、学振の場合、採択されなかったことを、もう挽回できない失敗と捉えてしまう若い人が少なからず見受けられます。そういう人たちには、「不採択」情報があると良いかもしれません。

そうすると私はお役に立てます。学振には複数回応募しましたが、採択されたことはなく面接に呼ばれたこともありません。しかし、その後30年近く研究の道でなんとかやってこられました。私の申請書はひどいもので、とても人に見せられるものではありませんでした。しかし、そこから、自分の研究内容や構想をどう表現し人に伝えるかについては、何年もかけて学びました。将来が定まっていな若い人に余裕を持ってと言っても、無理な

話ですが、ある時点の評価よりもその後の人生のほうが長く重いことも、伝えなければならぬことと思っています。

現在の大学院生には、学振以外にも、いろいろな経済支援がありますが、その分、早い段階で、採択・不採択の評価を受ける機会も増えています。枠が決まっている以上、選抜は避けられません。私もそのうち一つのコーディネータをしているので、言いにくいところもありますが、選抜の結果は研究者としての将来を保証しているわけでも、否定しているわけでもありません。金銭的援助の有無は決定的に重要ですが、それと自身の能力を直接結びつけるような先入観を持って欲しくはありません。優秀な研究者を育てるには、優秀な人たちだけを相手にすれば良いというものでなく、多くの普通の人を（画一的という意味でなく）丁寧に育てるしかない、私は思うのです。

齊藤宣一
(数理科学研究科)

